

2014年度個人特別研究費A 研究成果概要

所属・職・氏名： 商学部・教授・梅咲敦子

研究課題：コーパスを活用したフレイジオロジーに基づく英語指導法の開発と検証

研究期間：2014年4月1日～2015年3月31日

研究成果概要 (2,000字程度)

2010年度から標記テーマを基本とした研究に取り組んでいる。従来の英語教育は文法偏重傾向が強いが、実際の言語使用は、文法規則よりはるかに、フレーズ、定型表現や連語などと呼ばれる意味のある高頻度の語連鎖の組み合わせに依存していると考えられる。本研究では、このフレイジオロジーの理論としての妥当性を自編および既存コーパスで検証し、本理論に基づく英語教育の再構築を目標とした。具体的には筆者のすでに収集した論文コーパス(CEAP)1.5億語を活用した特定目的の英語教育(ESP)と、既存の大規模コーパスを利用したEGP教育のための教育法・教材開発、誤用分析を中心とした検証、そのために必要な、定型表現の実証的研究を行うこととし、以下に一例を示すような成果を得た。このような実証的研究結果は、実際のコミュニケーションでは、可能な形式のなかから、定型表現や慣用表現と呼ばれる語連鎖が言語使用を組み立てていると主張できる可能性を示している。

CEAPにおける高頻度の語連鎖をみると、例えば、論文の序章で当該研究の重要性を指摘した後に「未だ当該内容については良く知られていない」ことを表現する際によく用いられる語連鎖 *little is known* 877回中、*little is known about/ of/ on/ concerning/ regarding* はそれぞれ 729/ 34/ 13/ 13/ 11回の出現頻度で *little is known about* が圧倒的に高頻度であった。同様の機能を果たす語連鎖では、*little research has been* 167回中、*little research has been done/ conducted/ carried out/ performed* はそれぞれ 54/ 45/ 23/ 3回であった。また、*little work has been* (87回)の場合、*little work has been done/ conducted/ carried out/ performed* は各 72/ 3/ 4/ 1回であった。さらに、そのうち後続する前置詞をみると *little research/work has been done on* が各 26/ 35で *about* が後続する例は見られなかった。本例から *little is known* の場合は *about* が、*little research/work has been done* の場合には *on* が後続する確率が高いことが分かる。この差は、BNCにおける *know about/ on* と *do research about/on* の頻度が 3755/ 179 と 0/ 21であることから、*about*、*on* と動詞との結合関係(コロケーション)に起因すると考えられる。換言すれば、知覚に関わる動詞の場合は *about*、行動に関わる動詞の場合は接地点を示す *on* と結びつきやすい。語と語は互いの本質的意味から共起しやすい組み合わせとし難いものがあると考えられる。

同様にCEAPで、例えば *it should be noted* と *it must be noted* の出現頻度を比較すると前者が3561回に対し後者は295回とかなりの差が見られる。用例を精査すると、論文テキストにおける機能として、前者は「留意点の但書」、「研究成果の限界の指摘」を有する定型表現としてよく使われるのに対し、「注目すべきは～」のように、「焦点化」「注意喚起」の機能を果たす傾向が相対的に強いと考えられる(例(1)(2)参照)。これは、「義務」を示す *should* と *must* を比べると *must* の方がより強い義務と考えられることと合致する。論文の結論部に入れる情報として著者自身の研究に対する限界を述べるのが一般的であり、その際著者は強く研究の限界を指摘したいとは考えないであろう。意味機能と語の結びつきが頻度差の結果に表れていると言える。

- (1) This possibility suggests that there might be important differences in how multiple meanings of ambiguous words are activated depending on whether they are across or within languages. However, *it should be noted* that our dependent measure, naming errors, may not have been sensitive enough to pick up on the time-course differences with which the multiple meanings were activated. Future studies, using more sensitive dependent measures such as eye-tracking should address this issue further. [CEAP]
- (2) Flyvbjerg et al. deliver an interesting contribution on this issue. First of all, *it must be noted* that their study focuses on a certain category of projects, so-called transportation infrastructure projects, and secondly, the data comes from projects all around the world from a period of time stretching from 1910 to 1998. [CEAP]

英語教育では、研究に基づく語の本質的意味を説明しながら、有用な定型表現をコーパスで実証し、記憶に定着させることも効果的な指導法と考える。論文では、論文に含める情報と情報の流れに沿った定型表現を取り上げて行く必要があり現在整理中である。大学学部での英語授業では、コーパス検索実践例を組み込んだ教材を準備した。これらを通して、コンピュータが普及した現在、従来の辞書に加えて、コーパスも併用して受講者自身が英語を自在に楽しく使用できるようになる術を教える必要があると考える。

他の研究成果は以下の通りである。

[図書・口頭発表]

- ① 梅咲 敦子、「大規模コーパスによるコミュニケーション的視点からの受動形の分析」、深谷輝彦・滝沢直宏編『コーパスと英文法・語法』第10章担当、ひつじ書房、2015。
[学会発表]
- ② 梅咲 敦子、「コーパスを活用した no wonder と no surprise の機能分析」、関西語法文法研究会、2015. 7. 11、関西学院大学（西宮市）。
- ③ Atsuko Furuta Umesaki, "Learning Prepositions through Corpora: with special reference to Phraseology and Register", AILA World Congress 2014, 12 August, 2014, Brisbane Convention & Exhibition Centre (Australia).
- ④ 梅咲 敦子、「ディスコース・レジスターから見た言語形式再考のためのコーパス利用」、英語コーパス学会主催シンポジウム『私の研究テーマにおけるコーパス利用』、2014. 4. 26、同志社大学（京都市）。